

## 有朋自遠方来

美術館の社会的役割は、一般の人にまだ広く認識されているとは言えません。お客様に“美”を享受していただくために、同様に“美”の享

受者であるはずの館の私共裏方達が、日々いかに多忙な時を送っているかということは、意外に知られていないようです。

その私達の仕事の一つに、“美術研究者への協力”がありますが、私共の全面的協力の態度を知って、これまでに当館所蔵品の研究に足を運ばれた方々は、日本内外を合わせてかなりの数に昇っています。大抵は美術史研究者が多いのですが、この度、当館には珍しく、若い美術保存技術研究生が訪れて、絵画の模写を行いました。

東京芸術大学の大学院美術研究科保存修復技術研究生である小松崎千砂子さんは、当館の“婦人像”(桃山時代、紙本着色)の現状模写のために、以前にも、この夏の間二週間当館に通われ、今回再び、11月初旬にかけての二週間をその完成に当てられました。小松崎さんはこれより前、母校の東京芸術大学が所蔵する金剛界曼荼羅図像、金光明経残欠、醍醐寺五重塔板絵、敦煌壁画(2点)の模写を完成され、今度は六作目に当るそうですが、縦54cm、横38.7cmの婦人像制作のために朝10時から夕方5時まで、約4週間をかけるというのはおよそ普通のスピードということ



です。また、その制作工程は次のように行われました。

1. 原画と同寸の写真から、薄美濃紙に墨で上げ写しをする。
2. 上げ写したものを裏打ちしパネルに貼り込む。
3. 原画を見ながら彩色を施す。

この他に、方法としては臨写、コロタイプ印刷による方法等があるそうです。

原画の変色の状態をそのまま模写する(現状模写)には、長年空気に触れて酸化してしまった各部分の当初の色を科学的判断によって推定し、その鉱物性顔料(当初のものに近い状態で作られている)を火にかけて退色させ、古色を滞りさせるといことです。鉱物性顔料で得られない色は植物性の染料を用いることもあるそうです。

保存のための絵画の模写と云えば、最近では高松塚古墳の壁画模写が世界的に貴重なものとして挙げられますが、文化財の保存修復という重要な仕事にたずさわることとなるような若い人々の存在は、もっともっと知られてよいと思われて仕方がありません。

(写真は制作中の小松崎さんと“婦人像”)

季刊 美のたより No.30

昭和49年12月1日

発行 大和文華館